

日米親善人形交流 90 年

——100 年にむけて——

青木 勝

はじめに

皆さん、こんにちは。私は、東京浅草とよく言われるのですが、浅草からちょっと離れていて、浅草橋にあります人形の吉徳の顧問をしています青木勝と申します。

さっそく、来年 2017 年は、1927 年（昭和 2 年）の日米親善人形交流から、ちょうど 90 年を迎えます。その 90 年の節目の年に、ここ愛知県で人形交流 90 周年記念、「青い目の人形と答礼人形ミス愛知の里帰り展」が開催されることは、私たち日本アメリカ両国の友情人形の関係者一同も興味深く注目しているところです。私は、今まで沢山の各県の答礼人形の里帰りについて協力してきました。しかし、今回のように里帰りさせる会の事務局の第 1 回の会議から参加させていただくのは、初めての事です。ですから、非常に嬉しいです、大変興奮しています。私の今までに経験したことなどが、皆さんのお役に立つことができれば、幸いであると思っています。本日は、里帰りの 1 年前のシンポジウムとして、答礼人形のお話から、日米親善人形交流に関わる方々から得た、これからの展望などをお話したいと思います。どうぞ、よろしくお願ひします。

吉徳と答礼人形の関わりの歴史

最初に、吉徳と答礼人形の関わりをお話したいと思います。

まず、吉徳は 1711 年（正徳元年、江戸時代中期）の創業で、この正徳元年というのは赤穂浪士の討ち入りがあった 10 年後になります。現在では、東京で最も古い人形の専門店です。今年（2016 年）で創業 305 年を迎えました。1927 年（昭和 2 年）の日米親善人形交流は日本の人形界にとっても、私どもの会社の吉徳にとっても、今なお忘れがたい大きな出来事です。実は、当時、答礼人形の企画・製作の指揮にあたったのが、吉徳 10 代目の山田徳兵衛です。そして、1974 年（昭和 49 年）の答礼人形の里帰り第一号の「ミス広島」の監修を手始めに、近年の答礼人形たちの里帰りに際しては、先代の心を受け継ぐ 11 代目の山田徳兵衛が、その大多数の人形の修復を監修致しました。現在は、亡き 11 代目に代わって、現社長の 12 代目の山田徳兵衛が、その心を受け継ぎ、答礼人形の修復に積極的に参画しております。

吉徳の長い歴史の中で、祖父から孫の 3 代にわたり、当主が日米親善人形である答礼人形に関わり続けてきたことは、人形が結ぶ何か不思議な縁であると思います。

さて、私は、1972 年（昭和 47 年）に大学卒業後、東京浅草橋にある吉徳に入社して、今年で 44 年目になります。入社後すぐに吉徳の本店である浅草橋本店で、日本人形の販売、節句人形の販売を中心に宮内庁や外務省関係などの特別な業務を担当してきました。特に浅草橋の本店長、そして社長室の勤務の時から、11 代目の山田徳兵衛の元で、答礼人形の点検及び修復を担当することになり、数多くの答礼人形たちのお世話をして現在に至ります。そして、今まで答礼人形たちの修復を進んで引き受けてきた関係上、彼女たちの美しさと品位の素晴らしさに

虜になった一人です。

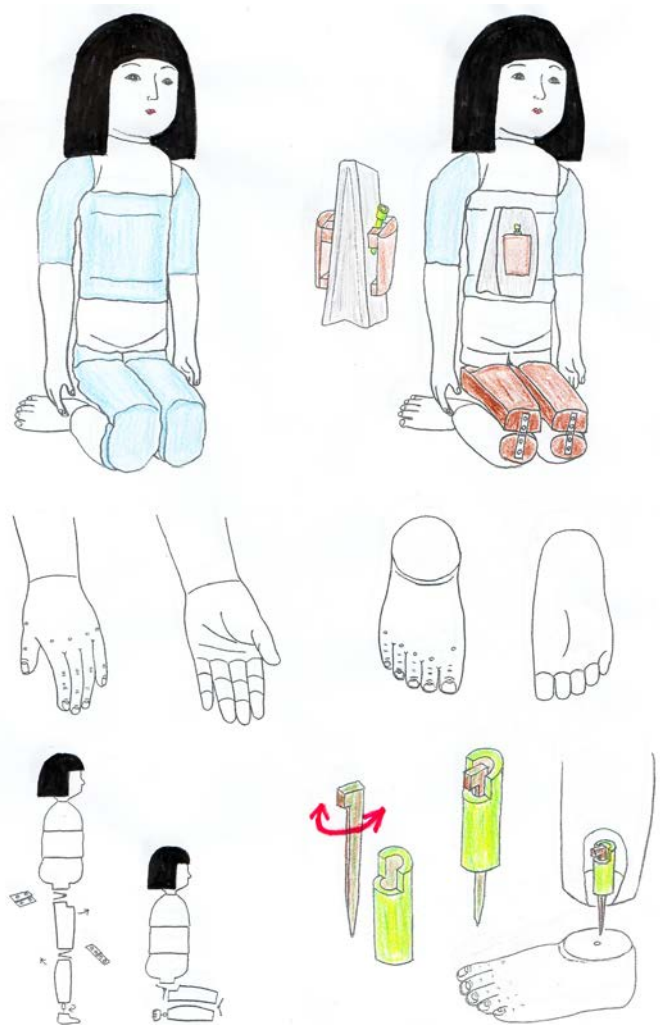
答礼人形と私の関わりは、1983年（昭和58年）のミス大日本「倭日出子」の里帰りから始まり、以来答礼人形の修復を担当してきました。昨年（2015年）の「ミス岩手」、そして今年の「ミス静岡」、そして「ミス群馬」で41人目となります。近年では、人形の修復だけでなく、日本とアメリカの各地区の答礼人形の里帰り行事に積極的に参加して、彼女たちの着物の着付けなどもしています。

答礼人形の技巧と美

答礼人形は、いずれも清らかな少女の美しさと凛とした気品を併せ持つ素晴らしい人形です。それは、当時の名工たちの人形技術の粋を一身に集めた第一級品の人形であるからです。答礼人形の素晴らしさについては、人形の出来映えを昭和2年9月20日発行の『東京玩具商報』（現在は『トイジャーナル』という名前で発行している月刊誌です）。その第287号に「遣米使節たるお人形の竣工」と題して次のように書かれています。「去る9月17日に接受を完了した人形たちは、特に名工の丹念を凝らした麗顔玉の如き容貌に、衣裳は色とりどりの友禅模様の三枚袴に、金糸爛たる帯姿凛々しく、華麗で而かも高尚な拵えは、先ず申し分なき出来栄えと見受けた。」と、このように絶賛しています。

レジメの私の書いたイラスト（第1図）を見てください。答礼人形の写実的な目、鼻、耳、そして愛らしい口を備えた顔立ちのあどけなさは最高です。手と足の指の形状は、指の骨の位置のしわから、指全体、指頭の膨らみ、爪から爪半月まで実に精巧に作り出されています。手のひらには、生命線、頭脳線、そして感情線まではっきりと溝を刻んでいます。そのあまりの可愛さに、お披露目では「握手の連続で彼女たちの手が黒光りするほど汚れた」というのも納得できます。また、羽二重の足袋を脱がせると、足の裏には土踏まずまで作り出されています。

このほか、人形の各部位ごとに、様々な工夫が凝らされています。どちらもイラストを見ていただくと分かると思います。大きさ2尺7寸（82cm）の答礼人形は、形態上は三つ折れ人形になります。腰と大腿部、そして膝と脛にあたる部分が、それぞれ金属の蝶番で固定しており、椅子に座るだけでなく、畳に正座をすることもできる構造になっています。ふくらはぎの膨らみのカーブにあたる太ももの裏側は、正座時に



第1図 答礼人形の構造と動き

丁度よくなるよう彫りこんでいます。足先にも工夫が凝らされています。正座をした際に、足首から先が外側に向くように、足首に固定された釘状の軸が、脚部に埋め込まれた竹筒の中で回転します。竹筒の最上部は、刻まれていて、真後ろに足が回転しないようにストッパーの役割を果たしています。イラストだけでは分かりにくいかもしれませんが、外からは見えにくいところまで細かな工夫が凝らされていたという事です。また、「泣き子」と呼ばれるフイゴ笛を胴に仕込んだ人形で、2枚の木の板を上部で合わせ、和紙と布で末広型の袋状にフイゴを作り、笛を取り付けた竹筒を通し、胴を押すとフイゴの中の空気が竹筒を通る時に、笛を鳴らすような工夫もあります。

さて、私どもは今まで数多くの答礼人形の修復を担当してきました。答礼人形の修復の難しさは、誕生した1927年(昭和2年)当時の初々しさと年月のもたらす古風さを共に生かさなければならぬことです。重症患者の答礼人形の場合には、各部位、すなわち頭、手、足、腰、胸を分解して、それぞれ治療の後に接合します。治療の多くは、汚れを落とした後に、貝の粉を膠で溶いた胡粉と呼ばれるものを繰り返し塗り重ねる形で行われます。特に乾燥によるひび割れや亀裂が多いので、桐の粉を正麩糊で混ぜた桐塑と呼ばれるものを補てんして下地を養生した後に、胡粉を繰り返し塗ります。また、三つ折れの接合部分の痛みも多くの人形で見られ、治療を必要としています。破損部分や欠落部分の整形手術も少なくありません。私は彼女たちに深く心を寄せ、細心の注意を払いながら、治療に努力しています。

答礼人形を訪ねて——「ミス愛知」の発見

さて、現在(2016年7月)、アメリカに渡った58体の答礼人形のうち、47体の存在が確認されています。「ミス愛知」は2010年(平成22年)にロードアイランド州の個人のお宅で、答礼人形として46番目に発見されました。発見当時の彼女は、西洋人形のかつらをかぶり、花柄のワンピースを着ていました。答礼人形本来のものは、下着のコンビネーションと羽二重の足袋だけで、着物や帯は失われていたそうです。1927年当時の記録では、ロードアイランド州には答礼人形として「ミス長野」が贈られています。そして、当地の博物館には人形と共に送られた道具類の他に、当時の雑誌、記録書類や子ども達の手紙が添えられています。しかし、人形は行方不明でした。この「ミス長野」として保管されていた行方不明の人形は、「ミス愛知」として、新調した着物で正装して、日本髪を備え、再び答礼人形として日米親善人形交流90年の記念すべき年に、愛知に里帰りすることは、大変に意義深いことです。

また、「ミス愛知」は、後頭部に記された銘により、平田郷陽作のお人形であることが分かりました。この方は、後に人間国宝にもなった、日本人形の第一人者です。本年(2016年)、里帰りした「ミス静岡」も平田郷陽の作ですが、生き人形の技法を取り入れた写実的な顔立ちが、他の答礼人形に無い大きな魅力になっています。なお、「ミス愛知」の発見の経緯については、来年の里帰り展示の時に、所有者でもある人形研究家のアラン・スコット・ペイトさんにぜひとも詳しくお話をいただく機会を設けられればと思います。

さて、答礼人形として45人目に発見された「ミス群馬」は、2009年(平成21年)にマレーシアで発見されました。唯一アメリカ国外で見つかった彼女の運命を確かめたく、2014年(平成26年)8月にクアラルンプールの日本人形の収集家を訪ねました。その訪ねた先の写真がお手元のレジメに載っています(第2図)。収集家のお宅では、日本人形を相当集めており、全部で300体ぐらいいました。その中で、彼女は、じっと私が来るのを待っていてくれたのかなと思います。人形の痛みの応急処置と着物の着付け直しをしながら、日米友好のメッセージを



第2図 「ミス群馬」とクアラルンプールで

携えた彼女の使命をよく説明し、将来はアメリカ又は日本に返還してほしいをお願いをして帰国した次第です。去年(2015年)、彼女は、幸運なことにアメリカに返還されました。今年、日本に里帰りして、現在は治療を終わりリハビリ中です。私どもでも、擦り切れた着物の振袖の製作をさせていただきました。(2016年)7月23日～8月21日まで、群馬県前橋市の前橋文学館で「戦争を忘れない展 ～平和を願った人

形たち～」の企画展で「ミス群馬」さんは、群馬県内の青い目の人形たちと一緒に展示されることになりました。

現存が確認されている47体の答礼人形のうち、日本へと里帰りを果たした人形は、41体です。残る6体の彼女たちの傷み具合を心配しながら、日本への里帰りを果たしてあげたいと思っています。47体が確認されたほかには答礼人形の残り11体がありますけれども、1体はハリケーンに流されて紛失していますので、行方不明の人形は10体で、まだ見つかっていませんので、今後、発見と各県への里帰りを期待しています。

「青い目の人形」たちの今

一方、1927年(昭和2年)に日本に贈られた「青い目の人形」は、現在把握している限り全国で336体が確認されています。昨年(2015年)、神戸市の甲南幼稚園に所蔵されていた名前の無かった青い目の人形に、ギューリック3世がお名前をつけていただいた「キャッシー」さんが加わり、これで336体が確認されたことになりました。まだまだ見つかるのではないかと思います。

さて、全国での友情人形の会の方たちが行っておられる、各地での青い目の人形を中心とする活動は、実に活発です。定期的に行われている幼稚園や小学校での青い目の人形を使っ
ての雛祭り、青い目の人形の劇や紙芝居、絵本の製作、そして市民参加のミュージカルなど、子ども達から市民の皆さんの関心のもとで継続してくれています。そして近年では、「新しい青い目の人形」が友好メッセージを携えて、日米親善人形交流に活躍しています。レジメの写真(第3図)がギューリック3世ご夫妻です。デニーさんとフランシスさんです。デニーさんは(2016年)7月に傘寿の80歳を迎えています。ご夫妻は、親善人形であるギューリック博士(ギューリック1



第3図 ギューリック3世ご夫妻

世)の意志を引き継ぎ、新しい友情人形として、1986年(昭和61年)から30年間にわたって、「新青い目の人形」を各地の幼稚園や小学校に贈り続けてこられました。これまで贈られたお人形の数は260体にもなります。私財を投じて、個人として贈り続けることは、お人形代、洋服代など経済的にも大変なことです。今年(2016年)5月26日にお人形を送り続けるキッカケとなった京都市の高倉小学校を訪問されました。708人の生徒さんと大勢の小学校関係者の皆さんによる温かい心のもった歓迎会に大変に感激されていました。また、その日の夕べに、新青い目の人形寄贈30周年記念式典を開催して、ご来賓と友情人形関係者の参加の中で、ご夫妻に心からの感謝の気持ちをお伝えしました。特にお人形のためにお手製の旅行カバン、着替えの洋服から小物まで、心こめて作り続けて来られた奥様のフランスさんの穏やかな心遣いにはお礼の言葉もありません。いつもお二人の変わりのない素晴らしい笑顔と、常に前に向かって進む行動力には驚かされます。ご夫婦の熱意に応えたく、私もこれからも長く人形交流の精神を伝え続けて行きたいと思います。

人形交流は人間交流——人形交流に関わった人々

私の答礼人形研究のバイブルである『人形大使：もうひとつの日米現代史』(2004年 日系BP社)の著者の高岡美知子先生の言葉をお借りすると、「人形交流は人間交流」であり、また「人形は語る、伝えるのは人間」です。『人形大使』の本は、レジメに写真が載っています(第4図)。この本では、今まで答礼人形や人形交流についての研究がまとめられています。大変な本です。それによれば、89年前、急増する日本人移民への反感から、アメリカで排日気運が高まりました。それを憂いたシドニー・ギューリック博士の提唱で、子どもを中心に何と270万人ものアメリカ人が協力して、親善人形として青い目の人形12,739体を贈り、その返礼として渋沢榮一の尽力により、日本の子ども達260万人の募金で答礼人形58体がアメリカに贈られました。日米両国で合わせて530万人の人々の関わったこの民間外交は、非常に大規模で画期的な出来事でした。



第4図 『人形大使』

1929年(昭和4年)に日米人形交流の橋渡しをしたニューヨークの世界児童親善協会が編纂し、シドニー・ルイス・ギューリック博士が書いた『友情の人形 ~Dolls of Friendship~』という本があります。日米親善人形の企画の全貌がこの中に書かれています。青い目の人形の来日と答礼人形の渡米を通した日米友好外交を詳しく伝えたアメリカ側からの貴重な文献でもあります。この本は、1997年(平成9年)にシドニー・ギューリック3世の手により第2刷の復刻出版がされました。この本は、「平和を望む者は、まず子どもの心にそれを訴えなくてはならない。この本は、海を渡った人形たちの冒険と人情の物語である——」という書き出しで始まります。そして、アメリカ側の青い目の人形の贈り主の並々ならない心尽くしや、答礼人形たちが、アメリカ各地で友愛の心に包まれ、大歓迎された事例が綴られています。全米をあげて人形の旅行局が設立され、青い目の人形それぞれに旅行切符、旅券(パスポート)を携えられて、アメリカの子ども達の身代わり役を務める形で、大勢の人形たちが日本にやって来たのです。

今もこの人形交流の精神は多くの人々に継承されています。しかし、知る人ぞ知るといえますか、関心を持つ人は増えてはいますが、かつてのような多くの人々が知っているという

訳ではありません。これからも日米両国共に、この人形交流について理解をしていただくためにも、友情人形の交流展の開催、友情人形の関連行事などを通して、青い目の人形と答礼人形が話題になり、そして未知の人々がこの人形を仲介にして、お互いの絆を深め、日米友好、世界平和に結びつくことを望んでいます。日本、アメリカ両国の人形大使たちが、永遠につぶらな瞳で友好メッセージを送り続け、彼女たちは語りたがっています。それを聴きとめて語り伝えていくのは、私たち一人一人です。近年は、アメリカ国内でも各地で答礼人形の歴史や、地域の答礼人形の同窓会としての合同展示のほか、シンポジウムも積極的に開催されています。アメリカでも次第に答礼人形への認識も広まり、多くの方が人形交流に感動して関心を高めています。昨年（2015年）12月の「ミス岩手」さんの里帰りは、アラバマ州のバーミングハム公立図書館と地域の婦人会の皆様のご厚意によるものです。震災復興過程にある岩手県民へのお見舞いと励ましの人形大使として、アメリカから年の暮れにクリスマスメッセージとして、日本に里帰りさせていただきました。今年（2016年）の春に無事に彼女は大役を果たして帰国し、バーミングハムの桜まつりで、「おかえりなさいミス岩手さん」の慰労の歓迎会を開催させていただきました。

人形交流を受け継ぐ人々——ギュリック3世と「友情の新青い目の人形」

昨年、「友情の新青い目の人形」のシンポジウムに合わせ、ギュリック3世ご夫妻が永年送り続けて来られた友情人形のリストの作成を始めました。さっそく、ギュリック3世から、届け先のリストのコピーを作っていただきましたが、その膨大なお人形の数と贈呈先の広さに驚くとともに、和訳の作業では様々な難題が続きました。しかし、リストの中の青い目の人形の一人一人の名前を呼びながら、贈呈先の場所や小学校や幼稚園の名前などをインターネットや郵便番号などで確認して、ご夫妻の友情人形事業の足跡を確かめながら、楽しい毎日が暫く続きました。リストの中から、来日の記録も読み取ることが出来て、ご夫妻の献身的な数多くの努力を感じました。お二人は、お人形を贈るだけでなく、積極的に日本の子ども達と直接会って、ご自分から話しかけ交流を深めている姿が大変素晴らしいと思います。

この「新青い目の人形」の一覧表は、ギュリック3世と何回も問い合わせをして、また各地の友情人形の会の方々のご協力をいただき、おかげで『新青い目の人形一覧表』を作製することができました。今年第2刷が出来ています。この確認作業のなかでも感じたことですが、近年の少子化や合併による人形保存校の統廃合が増えており、それにともない人形の所蔵機関の変更や保管先の移動が多く見られました。そして、何よりお人形たちは、永遠に語り続けますが、私たち自身の高齢化という大きな問題があります。高齢や組織の変更で、活動から離れた方や、共に活動していた方が、近年病気で亡くなられた方々もいらっしゃいます。普段から友情人形の会のメンバーの方と、人形交流行事の企画などを話し合います。数年前までは、「90周年までは頑張らなければならない」と話し合っていました。それももう来年になりました。次は11年後（2027年）の100周年に向けて頑張ってください。

この6月にギュリック3世ご夫妻とハワイでのバカンスにご一緒にさせていただく機会を得ました。マウイ島とハワイ島のアドベンチャーを楽しみながら、10日間3食を共にして、人形交流の意見交換もしました。そこで11年後の人形交流100周年へのご夫妻の御決意を伺いました。ケガをしないように、病気にかからないように注意して、長生きして健康な毎日をごすよう、自分にも言い聞かせながら、毎晩お話をして来ました。ギュリックさんは、7月29日に80歳の傘寿を迎えます。奥様は75歳です。お二人とも長寿の家系なので、長生きするとおっしゃっていました。なので、皆さんご安心下さい。来年（2017年）7月の愛知への訪問

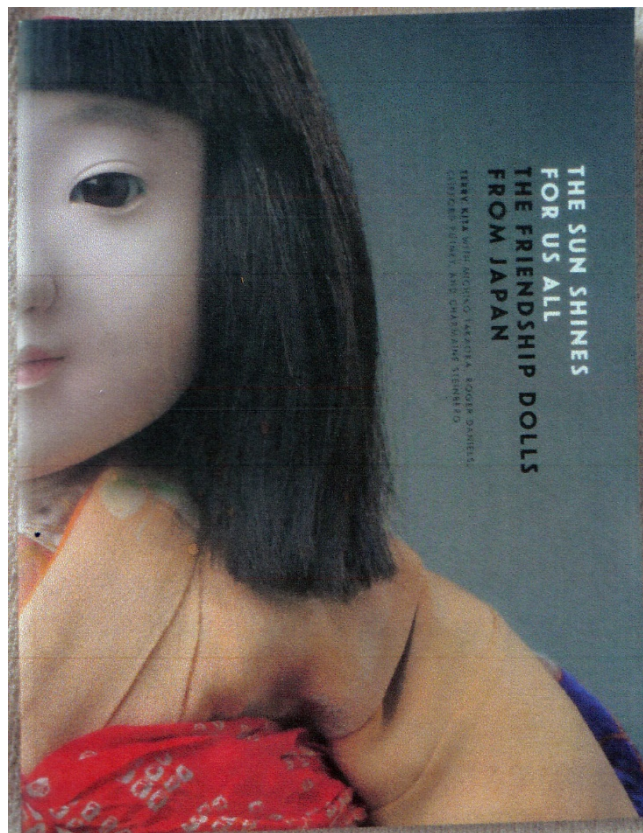
を今から楽しみにされています。

ところで、ハワイでは多くの虹を見ることができました。虹を見るご夫妻の楽しそうな様子は、とても印象的で、虹の発生をご自分の数学で解明できる（ギューリック3世の本職は数学者です）と聞いていましたが、「アメリカと日本の中に大きな虹が見える」とよく話されました。大きな虹の架け橋で結ばれた日米親善人形交流活動の尊さと継続していく想いを改めて感じました。ギューリック3世ご夫妻と共に頑張りましょう。

答礼人形の「願い」

再び1927年（昭和2年）の話に戻りますが、答礼人形に付き添ってニューヨークまで行った関屋龍吉さんは、答礼人形の代表である「ミス大日本（ミスジャパン）」の名前を借りて書いた『アメリカへ行った人形の日記』に旅の詳細を記録しています。その日記の最後に、「ミスジャパン」の三つの願いが記されています。1つは、「決しておめかしがしたいのではありませんが、身だしなみだけは忘れたくないので、汚れや傷みの時の為に、着替えだとかお代わりの品物でも送って下さい。そのことは、アメリカのお子様へどんなに良い感じを与える事でしょうか。それを考えて送って頂きたいのです」。2つめ、「日本各地に贈られたアメリカ人形のお世話を十分にしておいて下さい。これは、詳しく話す必要はありませんが、皆さんが私どもを心配して下さいのと同じように、アメリカのお子さん方が日本へ行っているアメリカ人形の身の上を案じているというメッセージです」。この願いは、戦争で残念な結果になりましたけれども。最後に、「皆さん、ご自分の県や都市や地方を代表している人形のいる場所を、お覚えになって、そして皆さんの中には、アメリカにおいでになる方もあるでしょう。その時は、きっと私どもを訪ねて下さることを信じます」。この3番目の願いは、高岡美知子先生が1992年（平成4年）から2004年（平成16年）の12年間をかけて、答礼人形を訪ねる旅を続けられた一つのキッカケです。私もこの気持ちを語り継いでいきたいと思えます。日本に贈られてきた「青い目の人形」、そして「新青い目の人形」を愛し、89年前にアメリカに渡ったまだ見知らぬ答礼人形を探しながら、ゆっくりと人形大使を訪ねて、身だしなみを整えてあげたいと思えます。来年は、まだ里帰りしていない答礼人形を訪ねるアメリカの旅を企画する予定です。

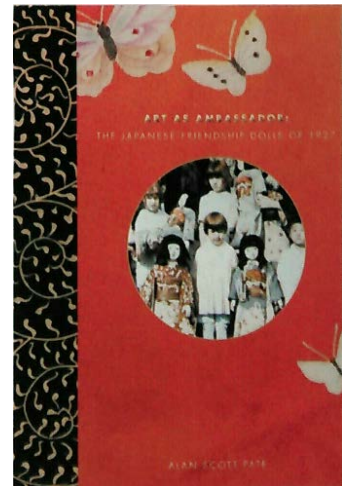
ここでレジメにありますアメリカの本2冊を紹介させていただきます。1冊目は、『*THE SUN SHINES FOR US ALL - The Friendship Dolls From Japan*』です（第5図）。答礼人形「ミス朝鮮」の新しい収蔵先、インディアナ州バルパライソのブラウア美術館で、昨年2015年8月



第5図 「ミス朝鮮」企画展時の図録

28 日に開催された彼女のオープニングの企画展として、「ミス朝鮮」をはじめペンシルベニア州にある「ミス高知」、オハイオ州の「ミス大阪府」と「ミス岐阜」、そしてオレゴン州の「ミス福岡」という答礼人形たちの 5 人展のオープニングセレモニーで、お披露目された本です。いかにもアメリカらしい装丁です。お人形の顔が半分になっています。これが「ミス朝鮮」です。「ミス朝鮮」は、1998 年（平成 10 年）5 月に 40 番目の答礼人形として、コネチカット州で発見されました。その後、彼女の展示方法などを憂いたギューリック 3 世により、2013 年（平成 24 年）に日本への修復里帰りを果たしました。そして当時の収蔵場所のコネチカット州からインディアナ州のブラウア美術館に寄贈されました。ギューリック 3 世が仲介になって寄贈されたということです。この本からは、1927 年の日米親善人形交流から現在まで、その志はギューリック博士の孫になる 3 世はじめ日米共に多くの方々を受け継がれ活動が続いていることが分かります。著者のテリー・キタさんは、テリー・ヒーナさんとして日本でも活躍された答礼人形研究の先覚者です。彼女は、1987 年（昭和 62 年）に上智大学で学び、人形研究を続けながら徳川美術館などで学びました。答礼人形「ミス高知」の里帰りを手伝い、高知市の女子高校で教えつつ、全米に渡って答礼人形の現状調査を行い、詳細な報告書を作成しています。今でもギューリック 3 世ご夫妻と深い信頼関係を保っておられ、小学校などでも子ども達に人形を通じて国際理解を広めようと努力を続けておられます。

もう 1 冊は、アメリカを代表する日本人形の研究者であり、古美術商のアラン・スコット・ペイトさんの著書で『ART AS AMBASSADOR ～The Japanese Friendship Dolls of 1927～』です（第 6 図）。ペイトさんは既に多くの著書も出されていて、2005 年には『NINGYOU』という本も出されています。今年（2016 年）の 6 月にペイトさんが帰国される時に成田空港でお見送りしながら初版本のコピーを見させていただきました。この本はまさしく答礼人形の大図鑑です。彼の 10 年近くの日本人形と答礼人形の研究の集大成となる図鑑です。私も来年の答礼人形の里帰り展の時に、「ミス愛知」の発見の経緯を含む答礼人形への彼からのメッセージが楽しみです。



第 6 図 ART AS AMBASSADOR

おわりに——ギューリック 3 世からのメッセージ

最後に、メッセージを読み上げて私の話を終わります。本年（2016 年）5 月 26 日に京都で開催された「友情の新青い目の人形 30 周年記念祝賀会」でのギューリック 3 世ご夫妻のメッセージを抜粋して披露します。

1927 年の日米親善の人形事業の使命は「世界の平和は子どもから」日米の子ども達が互いに感謝し合い、友情を育てる事でした。不幸にも「友情人形」の多くが失われてしまいましたが、一部の人形は生き延びました。この人形たちが、両国の友情のメッセージを運んでくれると信じてくれたのでしょうか。

1986 年の来日の際、小学校の歓迎会で私たちは 1927 年の「友情人形」に会うことができました。私と妻はとても驚き、人形を抱くことができ本当に喜びました。まるでかわいい赤ちゃんのようだったのです！また、新しい友情人形をプレゼントした時の子ども達の輝く瞳を見て感激し、これがきっかけで 30 年前の 1986 年に新たな「友情人形」の使命がスター

トしたのです。

この「友情人形」たちは、1927年からの人形交流の使命や、その後1986年に始まった人形交流の目的である友情や相互理解のメッセージを届けてくれています。私たち夫婦は、そのことを知ることができて本当に嬉しく思っています。

皆様が、幸せで健康に、そして平和に年を過ごせますように。ありがとうございました。
2016年5月26日 シドニー・L・ギューリック3世

以上が、ギューリック3世ご夫妻からのメッセージです。来年7月に皆さんで「ミス愛知」とギューリックご夫妻を温かくお迎えしましょう。ありがとうございました。